

日本古典文學大系 56

上田秋成集

岩波書店刊行

上田秋成集

日本古典文学大系 56

昭和 34 年 7 月 6 日 第 1 刷 発行 ©

定価 600 円



校 注 者 なか むら ゆき ひこ
 中 村 幸 彦

東京 都 千代田区 神田一ツ橋 2ノ3
発 行 者 岩 波 雄 二 郎

東京 都 青 梅 市 根ヶ 布 385
印 刷 者 山 田 一 雄

発 行 所 東京 都 千代田区 神田一ツ橋 2ノ3 株式 会社 岩 波 書 店

落丁本・乱丁本はお取替いたします

日本古典文学大系
別 巻 総 索 引
引 換 券

(上田秋成集)



66—27

全66巻御購入の方に限り有効。完結次第この引換券を切りとり、御購入書店へお渡し下さい。総索引を贈呈。

岩 波 書 店

目次

解説	三
凡例	二六
雨月物語	三
序	三
卷之一	
13.5 白峯	三七
菊花の約	四七
卷之二	
15.5 浅茅が宿	五
夢応の鯉魚	七
卷之三	
12. 仏法僧	七
吉備津の釜	六
卷之四	
12.5- 蛇性の姪	九

卷之五

青頭巾……………三

13- 貧福論……………三

春雨物語……………一四三

血かたびら……………一五

天津処女……………一五

海賊……………一六

二世の縁……………一七

目ひとつの神……………一五

死首のゑがほ……………一八

捨石丸……………一九

宮木が塚……………二〇

歌のほまれ……………二三

465- 樊噲……………二四

膽大小心録……………二四九

〔参 考〕

膽大小心録 書おきの事……………三三

異本膽大小心録……………三七〇

膽大小心録 異本……………三七六

補 注……………三八三

解説

一 秋成略伝

上田秋成は、文化六年（一八〇九）六月二十七日に、京都の百万遍屋敷、羽倉信美の邸に没した。行年七十六歳。逆算して、大阪で生をうけたのは享保十九年、日は六月二十五日であったという。実母（田中氏か）は曾根崎の妓家の娘との伝えもあるが、「生レテ父無シ、其ノ故ヲ知ラズ」（自像笈記）と述べる秋成は、実母についても殆ど語る所がない。四歳、堂島永来町で油と紙をひさぎ、嶋屋と号する上田氏に養われた。幼い彼はここで仙次郎と呼ばれた。二人の養母の丹精はあったが、五歳痘の大患に逢い、とかく病弱の故に、自由な、従って個性をのばせる少年期を持った。為に、やや長じては保養が煙霞の癖となつて、近畿の各地に杖を引き、折花攀柳の巷にも出入した。正しい教導を考慮した父は、早く彼を懷徳堂に通わせ、ここで五井蘭洲に接したかと想像する。しかし彼は正しい學問より乱読を愛した。そして當時の書物好きの風流青年の定跡として、二十歳前後から、漁鳶と号して俳諧に遊ぶ。白羽・紹簾・淡々・凡圭など京阪の宗匠と交渉したが、定まった師はなかった。宝曆の列仙伝に独武者の俳人としての「ぞゑん」、寛政の虚実柳巷方言の名家の部に「漁鳶」と載るのは、彼の青年期の名残を留めるものである。青年期の狂蕩は、彼によい友人をもたらし、木村蒨葭堂とは煎茶を嗜み、俳友勝部青魚には中国小説に導かれ、同じく俳友富士谷成章とは日本古典・語学の話が交わされた。中にも先輩小島重家には契沖の書を勧められ、賀茂真淵の著書にも接し、俳諧より和歌歌学への転機がここ

に生れる。漢学も努めて明和元年には朝鮮使節との筆談に出たが、三十歳頃から下冷泉家に歌学と作歌の添削を求めた。二十代は、二十二歳上田家の実子の姉が家出したことと、二十七歳植山氏たまを妻とした以外は波瀾なく終った。

三十三歳の明和三年（二七六）正月、諸道聴耳世間猿五冊、明和四年正月、世間妾形氣四冊、二部の浮世草紙を出した。これも文才あって俳諧に遊ぶ者の常といえ常であった。当時神道・故実で喧伝された多田南嶺の鎌倉諸芸袖日記に直接影響され、越えて、江島其磧・井原西鶴・近松門左衛門の影も濃い。が既に読書範囲は和漢にわたり、筆力あり、現実に対して、冷静な批判的な作家不可欠な姿勢を持って、彼の生涯にわたる問題の萌芽は、この二作にも認められる。明和五年の序ある第三作はしかし浮世草紙ではなかった。浮世草紙の風体の衰微する小説界の大勢を察したか、浮世草紙作家と書肆のあり方に不満であったか、彼の好みが現実より古典的なものへ傾いて行ったか、都賀庭鐘の創めた、中国白話小説の翻案、雅文調の濃い作品であった。いうまでもなく雨月物語のことで、この物語の刊行を見る安永五年までの八年間を含む、四十代中頃に至る十年間は、秋成にとって、最も多端且つ有意義な期間であった。

古典癖は昂じて、新興の真淵国学に興をいだし、たまたま上方にあったその門建部綾足に、ついで加藤字万伎に師事した。時は明和四年の頃か（明和七年説がある）。以来、聴講・文通で研究に専念した。明和七年（宝暦十一年ともいう）養父を失い、翌八年火災の為に、家財をも失って、三十八歳にして始めて生活に直面した。医を業に選んで、天満の儒医都賀庭鐘の塾に入る。仮寓を、痘患以来の信仰神であり、国学の門人藤提燕・打魚が神官であった大阪北郊加島稻荷の近くに定めた。篤実な字万伎からは多く文通で、真淵の国学をあくまで吸収した。安永六年、字万伎が京都在番中に没した後、独学で研鑽することになる。視野広い文人の庭鐘からは、生来の好事的な性格を拡充された。寛政四年の安々言に序を求めたようにこの二人の關係はかなりに続いた。一方彼の一言の師であった高井凡圭の一子凡董が、父の十三回忌の俳書其雪影（安永元年刊）出刊が契機となったか、その頃から凡董の師蕪村ら夜半亭一門との俳交が始まった。既

に無腸と改号した彼の俳文法書、也哉抄（天明七年刊）の序者は蕪村であった。几董の日記、蕪村の書簡にその交渉は見え、彼のこの後の俳諧は、この一門の中で続いた。かねて好んだ宗因の句集、梅翁発句むかし口を編刊したもの、この期である。学問医術に従ったこの頃の彼は、称東作、名秋成、別に三余亭後に余斎の号をも持った。

安永四年（二七七五）大阪尼崎町一丁目に医を開業した。彼の生涯の考えで、生活の基盤たる業に従うは「まめ心」で、学問・文芸に遊ぶのは「あだ心」のなす所であった。「あだ心」を抑圧するに内心の苦悶はあったろうが、その業に専念することを誓った。患家へ便安を事としなかったが、真面目さが迎えられて繁栄、天明元年には淡路町切丁に自宅を構えるに至った。生涯の最も落ちついた期間である。書肆に進められれば、書初機嫌海（天明七年刊）などの軽い読み物さえ書いた。生活の安定は再び学問へ興味を駆った。和文和歌は既に儕輩に高く評されていたが、学問は安永年間の伊勢物語考・長柄都考・さゝ波都考に比して、遙かに整った漢委奴国王金印考（天明四年）・歌聖伝（天明五年成）の考証もある。宇万伎ゆずりの仮名遣い論や、庭鐘の立場にも通じる世界史観で、本居宣長に論争をいどんだ（往々笑解・呵刈蔑。学の厚さや国学的信念では宣長に及ばぬとしても、自由な立場と、着想の俊敏さは、秋成の学問の性格を示している。天明三年で彼は五十歳。文学作品の端々にも萌芽的に現われていた彼の社会人生面に対する考えや、学問的立場も、自己のものとして定まったのは、この間である。宇万伎を通して真淵国学を、自己の経験と内省を通して、直く明らけき精神をもって、清く強く純粹に生きるべしとする人生観。「事物みな自然に従つて運転」すれば、「往時は往時にして宜しく、今世は今世にて宜し」とする一種の運命観。学問や文芸は独創を尊ぶ故に、才能のある人のみの独学によるべしとする修業論。学問の一々の主張立論は省略するが、一言ぜひ言うべきは、彼はこれらの自己の理論に従った合理主義者であった。上代の研究も、実証すべきなきは穿鑿を止むべしと言う。実生活における奇矯とされる言動も、彼が自らいう癡癖で感情のみで動いたのではない。彼ながらに定めた立場において極めて合理的に行動したのであった。

天明八年（二七八八）五十五歳。折角の医業を廢して再び加島稻荷の近く淡路庄村に閉戸素居の生活に入る。鶉居と号した。原因は病身と、誤診の自責故と自ら述べるが、或は経済的な原因も存したか。直接原因は何であつたにせよ、現世逃避の隠棲に違ひなかつた。その心情は鶉居で著述した癩癖談（文政五年刊）の最末の一章に見える。世間との交渉は財政的に煩わしい。俗間は虚偽と不徳義に満ちて、見聞するに耐えない。文芸に遊べば古代のみゆかしくて、現在はいふとましい。しかし考えれば理想通りの社会は何時とてもあつたことはない。惡むべしといつてもそれが現実である。現実を遁れる者はいたらずら者であり、自意識が強く、批判のみするは精神的なおごり者であると反省しても、自分の潔癖な批判の正しさも否定できない。当代に合致せぬ自己を運命とあきらめて、生來のままに純粹に生きる、いわゆる文人逃避の境涯に入るより外の道は、彼の人生觀運命論からしてなかつたのであらう。この生活の姿勢は、これから後その死まで続く。折から研究中の伊勢物語に擬して、その閑暇の鬱懷をやつたのが諷刺的作品癩癖談二卷である。

淡路の庄で母と姑母をみとつて身輕になり、今は珊瑚璣尼となつた妻が生れ故郷とてなつかしがり、病を見ていた近隣の子供の死にいたたまれない氣になつて、——人の面前でも惡罵を敢てする彼は又、そうした心づかいをする人であつた——寛政五年（二七九三）六月、かりそめの心づもりで京都知恩院門前に住んだ。それから南禅寺畔など住所は転々としたが、伴蒿蹊・橋本経亮・松村月溪・小沢芦庵とその門下の人々の風交の中で、結局生涯を京都で送ることになる。再度の田舎生活から寛政九年六十四歳で妻をなくするまでは、左明を失うような不幸もあつたが、国学上の仕事を整理したり、諸方に遊山して詩囊を豊かにすることが出来た。歌文は、藤篋冊子や秋成遺文に収まつている。彼として最も力を尽した古典論で、加藤千蔭から国賊よばわりをされた、古事記偽書説を含む安々言（寛政四年成）も成り、仮名遣い研究の靈語通（寛政九年刊）も、門人谷直躬により上梓された。師宇万伎の上佐日記解を、前の雨夜物語たみことば（安永六年刊）同様、出板すべく浄書補記した（寛政二年）。寛政三年、あかたしやうしやうたしやう 県居歌集・静舍歌集を出したと共に、師の十三年忌の供養

でもあった。文布あやたの(寛政二年)・懷風藻(寛政五年)の再版にあずかって、序をしたためたのは、国学者としての世評の高さを示すものである。また寛政元年に真淵の古今集打聴を校刊し、寛政五年に伊勢物語古意を出した。伊勢物語に就いては自らも、よしやあしやと題する全部の注釈があつたが、この校刊には、その中自信ある部分を一冊にまとめ、その名で附録とした。秋成の国学的著述の中、今も最も高く評されている。その末尾をしめる和漢物語の論は、作家が当世に對する憤懣・諷刺・回想・さまざまの所懷を、むかし／＼の跡なし言や罪なげなる物語に示したとする一種の寓言論である。安永八年成り、やはり寛政頃再訂したと思われる源氏評論のぬば玉の巻にある性格、修辭の論と合せて、秋成の物語鑑賞創作の態度を物語るものである。刊行は遅延したが、池永泰良の万葉集見安補正(文化六年刊)を整理し(寛政八年序)、冠辭統貂かんせきとうじょう(享和元年刊)を草し終えたのも(寛政八年凡例)の間である。京へ移居した始め、近隣に煎茶の愛好家村瀬栲亭こうていがいた。共に文雅養性の技としてこの道に遊び、寛政六年、ために清風瑣言せいふうさげん二巻を出刊した。煎茶道では用器は新しきをよしとするので、自ら陶器の製作を試みて、現存して好事家の珍玩する所となっている。

寛政九年糟糠の妻の死は大きな打撃であつた。長く悲しみ弔つた。たにか漸く癒えた左明にかわつて、右眼を患うに至つた。寛政十年夏には養女(珊瑚の身寄か)の尼を伴つて、河内の目下、平瀬助道の妻で今は尼となっている唯心の庵に病を養い、土地の河澄氏・森氏など文雅の家にも出入したことがあつた。何かと不如意と孤独を思つて、親友芦庵が、和歌の門人をとれと勧めたのはこの頃であらうか。秋成はこの勧めを入れず、書肆の求める、落久保物語(寛政十一年刊)・大和物語(文化二年刊)などの校刊に従つて生活の資を得た。それでも蔵書を売却し、その最後を正親町三条公則卿に売ることゝあつた。公則は、この氣むつかしい老人を愛し、殆ど門人の礼をとつた。彼は土佐日記や万葉集を講じた。万葉卷三までの略注よめの杣きはその折のものである。この前後、秋成に万葉を聞く人々が他にもあつた。谷直躬(後に越の魚臣)や羽倉信美やで、各々、の本で秋成説を書き入れている。その結果、秋成の最大著、従來の万葉研究を結集した金砂

及び金砂剩言が成ったのは文化元年（一八〇四）である。むしろ随筆的な筆致であるが、この頃成った遠馳延五登（秋成遺文の史論として所収）と共に、秋成とその学問を如実に示す。私生活は、妻の死後の世話を見た松山貞光尼も寛政十一年没し、羽倉信美はその賀茂川丸太町河畔の別邸に住ませたりしたが、彼はこの頃から死を口にするが多くなった。妻を葬った八条大通寺の実法院へ、一族の戒名命日を告げ、自己の死後を依頼する書簡を出した。

晩年は大阪へ下ることが多かった。享和二年に没した蕪葭堂の晩年の日記には、彼の来訪を度々記しとどめている。秋成の死後墳墓を営んだ加島の藤氏も、懇切に遇した。享和元年（一八〇一）秋成に親しかった公卿や歌人たちを勧進して、詠稻荷社歌を奉った。この大阪滞在中に、想像によれば、養女の尼に相愛の人が出来たらしい。秋成はそれを心よく許して、孤独の最晩年に自ら入って行った。彼はその性行からも、宣長との論争などに見える主義の上からも一種の個人主義者であった。それで自分のみならず、他の自由をも認めたのであろう。しかし貧病に苦をかこつ彼の晩年は、それ程に孤独ではなかったと思われる。癩癖のままに人に向って憎々しい口をきき、腹立たせることもあったであろうが、その内心の純粹を愛する人々は、秋成自身が自己の発言によって自己をとじこめる程には、それを気にしなかった。かえってその警句をよみしたかも知れない。晩年はその性格を知って、遠巻きな親切で、彼の文学の発源である、常に新鮮な感受性や鋭い洞察力、その神経と精神をいたわる知人たちが周囲にいたようである。大田南畝の文章への讃辞は、彼をひどく喜ばせた。若い文人趣味の人々は、この先輩を慕った。釈昇道は文化三、四年の間に、彼の歌文集藤篋冊子六巻を高麗な姿で出版した。大沢清規と松本柳斎も文反古を文化五年に出版した。大館高門や田能村竹田らは煎茶道で訪い寄った。また彼の没後も長く年忌毎の歌会を催し続けた青年達（羽倉信愛自筆詠草）もあった。これらの人々に乞われては、数々の和歌文章を残して秋成遺文に収まる。清風瑣言の続篇茶癡醉言や新しい短篇小説集春雨物語や海道狂歌合や後の毎月集の試みやもこの環境の中で生れた。

享和二年（一八〇二）墓を南禪寺畔の西福寺に卜したりしたが、文化四年は老病に死を思うこと屢々であった。古井に金砂などの草稿を投じたのもこの年である。それからは死の準備のごとく文化五年、生涯の思念の総決算、胆大小心録を書いた。自伝と仮題される一卷もこの前後に成ったと思われる。またかねての春雨物語を十篇にまとめて見たが、意に満たず、生命ある間は背負った運命の如くに、稿を改めた。そして文化六年六月、一人住みを心配して引取った羽倉家に没した。知友たちは、遺言通り西福寺に葬り、三余齋無腸居士と追諡した。十三回忌、また生前の遺囑で栲亭の後毎月集題辞を碑文にし、森川竹窓の題隸で、今に残る墓石を作った。この略伝の末に、秋成を伝して最も詳らかな藤井紫影先生（秋成遺文所収上田秋成伝）の故智にならって、彼の自賛を掲げておく。「冥福蔽_二天真_一、厄貧顯_二奇才_一。」

二 雨月物語

刊本をもって行われる雨月物語の初版は、ここに用いた底本、「安永五歳丙申孟夏吉旦 書肆 京都寺町通五条上ル町 梅村判兵衛・大坂高麗橋筋壺町目野村長兵衛」合刻本である。半紙本五卷五冊。外題は左肩单边の題簽に、第一・三・五冊は「雨月もの語」、第二・四冊は「雨月物かたり」と各書体を違えて示す。内題「雨月_{うげつものかたり}物語」。柱刻は「雨月」とある。各冊、見開きの画が二カ所に挿入される。画風からして、秋成の友人で大阪の絵師桂眉仙、名は常政、字雪典の筆と推定する。ほかに見返しに「今古怪談」「雨月ものかたり 全五卷」「書籍所 野梅堂梓」の文字が見える一紙を貼附する書もある。野梅は野村・梅村の頭字を集めたもの。この見返しは最初包み紙用に作られ、後の刷にここに附されたのであるうか。また野村長兵衛の文煥堂蔵版目録一葉をもつものもある。この書には、同じ版本を用いながら装釘や冊数をかえ、出版書肆を異にした数種の後刷がある。刊年は初版のまま、半紙本五冊で、「書肆 大坂 心齋橋筋博労町名倉又兵衛、高麗橋筋壺町目野村長兵衛」（傍線の部分は初版のまま）板が言わば再板で、秋成の書初機嫌海が出た前後、天明

中の刊行でもあろうか。刊年初版のまま、半紙本五冊で、「書肆 大坂 心齋橋筋博労町名倉又兵衛 同町藤沢重兵衛」(傍線の部分は再版のまま)板が三版にあたり、享和元年藤沢こと柏原屋重兵衛らから冠辞統紹が出た前後の刊かと推定される。飛んで、大本仕立の三冊、「大阪書林 河内屋源七郎板」で見返しに「上田秋成大人編輯 雨月物語 全部三冊 浪花書肆文栄堂藏板」としたのが四版。文栄堂は河内屋のこと。ただしこれにも、末に三都発行書林として大阪心齋橋北久宝寺町河内屋源七郎の合板元として、江戸大伝馬町三丁目子屋平兵衛ら、六肆の名をつらねた奥附のつくもの(英国より板坂元氏報と、発行書肆として、江戸日本橋南壱丁目須原屋茂兵衛から大坂心齋橋通北久宝寺町河内屋源七郎まで十肆を並記するものがある。が共に、附された河内屋の出版書の広告から天保安政間の出刊と推定する。重ねていうが、板本は皆同一で、坊間、雨月に異版ありとするは誤りである。

著者は、自らの序に剪枝畸人と署するのみ。しかしこの人物の上田秋成なることは、近世物之本作者部類・京撰戯作者考や、四版見返しに見えて疑うべくもない。かえって、剪枝は剪指(肢)、痘を患って指の不具であった故、または剪枝は木鋏のことで、不具の手になぞらえた、いづれに解しても、秋成らしい戯号である。明和五年三月の序と、刊年の間八年の長きも、秋成の年譜を繙いて、国学に専念し、生計のために医を学び、居を転じ、実生活にも精神生活にも大いに変化のあったことを思えば、おくれたのも首肯できる。かえって、字万伎門や庭鐘塾での教養はこの作品には幸して、頭注に示すごとく、おびただしい古典から、一文一語を得るごとに使用され、板本につけば出版直前まで入木訂正の跡も生々しく、推敲が重ねられたのである。

所収は巻一に白峯・菊花の約、巻二に浅茅が宿・夢窓の鯉魚、巻三に仏法僧・吉備津の釜、巻四に蛇性の姪、巻五に青頭巾・貧福論の九篇、言うところの古今怪談、雅文調を混じた文章をもつてした短篇小説集である。以上は皆、和漢雅俗に出拠ある翻案小説である。また自ら序中、この作品を源氏物語・水滸伝に対比するのは、私に自負したので、二

大著の如く、この書も「事実ヲ千古ニ鑑」せしめるもの、即ち後年のぬば玉の巻やよしやあしやに述べる寓意を各篇は包蔵する筈である。出典の一々は頭注にゆづつて、その寓意と翻案の様相を主として本書の若干の特色を吟味する。

白峯 宝暦十三年に崇徳院の六百年祭があり、西行は兼ねて崇拜する歌人なり、西行撰集抄・山家集・保元物語・白峯寺縁起などから想を得て、西行が崇徳院の陵前に、その霊と論争する初冬の一夜を構成した。前半激しい論争の体は庭鐘の英草紙「後醍醐帝三たび藤房の諫を折話」に、歴史の未来を語る後半は同「紀任重陰司に到て滞獄を断る話」に先蹤があった。論の中心は、西行の難ずる儒教の篡奪革命説と、院の難ずる仏教の因果逃避の説であるが、秋成の立場は、国意考などに見える真淵の説である。儒・仏の二教が我が国に入ってから、人々は欲望をかきたてられて日本古来の質朴の思想が混乱し、代々の政治的動乱もそこに原因するという。この思想の一犠牲者として崇徳院を本篇の焦点に置いた。この歴史的悲劇の主は、覚らずしてなお革命説を肯定固執する。従つてその念は、怨恨の権化となった。この権化にまで単純化したことは、一段と作品構成を嚴密に、高い調子をもたせた。また謡曲松山天狗にならった複式夢幻能的構成にも合致している。この書の各篇が能的構成をとることは重友毅博士（兩月物語の研究）の肯綮にあたる説がある。最後の附言は、今日から見れば、中世説話的な贅疣であるが、まだこの時代ではやむを得ぬことであらう。その傾向は各篇に共通する。少しの甘みのない雄勁な文章も、作者の留意した所、軽視すべきではない。

菊花の約 中国白話小説集古今小説の「范巨卿雞黍死生交」を原話とし、後漢書の范式伝に発する中国舌耕文学の筋を、文章のとるべき所は採つて、かなり忠実に追う翻案小説の正系を行くものである。従つてその寓意も、冒頭に訳出した原話の結交行が説く信愛である。が秋成はその日本化に幾つかの相違でその手腕を示した。一は原話は儒学に志すとはいえ、百姓と商人の信義であるを、これは陰徳太平記尼子氏勃興の陰の人としての一武人と、青雲の志を絶った清廉の儒者との間にかえた。二に原話の范式には約束失念の一事があつて、信義に欠けるが、赤穴は全く欠ける所がない。

そして二人の友人の性格を、冒頭から言動において説きつくして最頂上を納得できるものにしてゐる。三に文章の美しさである。秋成は本書をなすにあたって、当時に行われた二つの美文、和文脈と漢文脈を混淆使用する。それも単に混ざるのみでなく、白峯のごとく理論の多いもの、男々しいさま、緊迫したさま、男子の物言いには漢文脈を、情趣的な場面、女々しいさま、あわれなさ、悠々としたさま、蛇性の姪の真女兒の如く嬌媚の言動には和文脈を使いわけ、次に述べる時代の違った用語文法を混ざることと共に、正式な文章の立場からは避くべきであるが、彼はこれによってすぐれた文学的効果を上げているを如何せん。赤穴の来訪を待つ文部の焦燥を、旅ゆく人ののどかさに對せしめた前後の心憎い文章をみよ。またこの間、宇万伎の講義もあって日夜親しんだ日本書紀・万葉集・土佐・源氏の用語を利用し、和名抄や新撰姓氏録を用いることも多い。また康熙字典を見たと思われる所もある。この字典を校訂翻刻出版した最初の人が都賀庭鐘で、安永七年刊。秋成の雨月物語推敲の時は、庭鐘塾では、この字典を校訂の最中にあたる。

浅茅が宿

明の瞿佑の雅文短篇小説集剪燈新話中の一篇愛卿伝に想を得た。早く我が国でこれを翻案した浅井了意の伽婢子(寛文六年刊)の巻六「藤井清六遊女宮城野を娶事」(文中に「宮木野」を照合した。なお秋成の前作世間妾形氣の巻三「米市は日本一の大湊に買積の思ひ入」「二度の動は定めなき世の蜷川の淵瀬」と続く二章は、既に前二書を参考しての作か、また共通の筋を持つ。が本篇には、特異な寓意がある。徒然草の百三十七段「男女の情も、ひとへに逢ひ見るをばいふものかは。逢はでやみにし憂ひを思ひ、あだなる契をかこち、長き夜を独り明かし、遠き雲井を思ひやり、浅茅が宿に昔をしのぶこそ、色好むとはいはめ」とある日本の伝統的な男女相愛の、兼好が定めた一理想がそれである。この文の前半の宮木と、後半の勝四郎の身の上に相当する。かくのごとき浪漫的な題材であるために、鎌倉大草紙や応仁記に考証癖を働かして背景を設けたが、主人公たちを、関東の質朴善良な男女とし、出来得る限り美しく描いている。甚だ素朴な形で最後に点出した手兒奈の話も、至純さで協和音を出すことを期待したのであろう。一筋に純粹に自己を

通してゆく宮木、それは作者秋成の性格の投影でもあって、雨月・春雨を通じて同系統の人物が多いが、本篇は、その最も成功した一篇で、そこに得た読者の感動は、彼女をかくも悲哀に投入した戦争の社会悪の批判へまではねかえる。ひるがえって、妻を愛すること深く善良ながら、はやり気故に失敗を重ねる勝四郎の人物のよく描かれたのも見逃してはならない。

夢応の鯉魚

主人公は大学頭藤原実範の第三子という實在の人物だが、ただ名を古今著聞集から借りたのみである。

この典拠は、宋の大説話集太平広記卷四百七十一の薛偉の一篇、同じく説話集古今説海の説淵十五の魚服記と、それらによつた中国白話小説集醒世恒言の「薛録事魚服証仙」の三者を共に参考したと考証されている(後藤丹治博士「夢応の鯉魚の原拠」——国語国文二十一の九)。秋成は中国舌耕家の饒舌をさけて、主として前二者——殆ど同文である——いずれかにより、簡潔に筋を進めた。が滝沢馬琴ならば、伏線・襯染など称すであろう計算的な整正の構成を作り、中に琵琶湖周遊の道行文ともいふべき美文さえ挿入した。この作品は一見洒脱な名人逸話とのみ見えるけれども、やはり寓意はある。それは芸術家と現実生活の問題である。芸術三昧境は、鯉となつて遊泳する時の興義であるが、饑えて食を求めんとすれば、人の好餌にかかつて現実の手ひどい目に逢う。この著作当時の秋成は、火災による家財の消失によつて、これまでの学問芸三昧から初めて現実生活に直面した。こうした経験や反省は、彼の一身に必ずあつたはずである。

仏法僧

曾遊の高野山で、彼のごとく俳諧を嗜む旅人が、太閤記から出た秀次らの霊に逢う。案は大江文城編の怪談

とのゐ袋(明和五年刊)卷四「伏見桃山亡霊の行列の事」と剪燈新話の竜堂霊会録に得たものであろう。本篇に目立つのは、夢然の説く仏法僧と、紹巴の霊の説く毒の玉川の二考証である。前者は岡西惟中の続無名抄や林羅山の本朝神社考などにより、後者は胆大小心録四六にも見える彼得意の説であつた。この篇は、考証をもつて寓意にかえたものである。

吉備津の釜

この解説では、当然のこととして各篇のすぐれた怪異味を語らずに來たが、怪異の点ではこの篇は本書

の第一席、否、日本文学中の白眉ともすべき一篇である。がこれにも寓意はある。冒頭に明の謝肇淛編の五雜俎を引いて説く、妬婦の祟の恐しさと、妬婦をして、その姦佞の性をつのらせる夫の側の責任である。全章を本朝神社考をかりて、吉備津神社の御釜祓の靈妙の中に大きくつつむ。放蕩者を写して、世間差形氣卷四の「息子の心は照降しれぬ狐の嫁入」を再出したのはしばらくおき、後半正太郎が相逢する再三度の怪異は、意志の弱い正太郎に、「用意なき」彦六を配して、当時流行した凡百の怪談小説とは類を絶して、誠に迫真的な表現である。説者はその原因を秋成が魑魅魍魎の實在を信じたことに帰す。それも一因でないことはないが、表現力なくして何で現代の読者までを魅了できよう。原野の一軒家では源氏物語の文章を、夜毎生霊の来訪には剪燈新話の牡丹燈記の構成を借りて、原話以上の効果を出している。最も身の毛のよだつ正太郎の最後には、頭注に示す数説の出典論があるが、そのいずれよりもこの作品を優秀とすることは誰人も異論はない。一旦縁あって夫婦となり、怨恨、宿讐の如く、一は呪い、一は呪われて、共に慘澹たる死に至る不幸は、いたらぬ二人への作者のきびしい筆誅とも見える。が作者は一言の勸懲の言を弄せず、憎しみの情を現わさない。思いこむ女の、たわけた男の生来の性格のやむを得ない結末として叙してゆく。為にかえって二人をかか
る不幸に導いた運命、封建社会における家庭、そのものへ読者の批判がそそがれる。秋成がどこまで当代社会の欠陥に深く批判の刃を入れたかは、彼の消極的な隠者生活からは否定的な答が出るが、問題はやはり提出されている。嫉妬や放蕩を描けば露骨に醜惡になる危険があるが、一点その氣味がない。この物語を通じて、当時雅文壇を支配した典雅主義・構成主義の線を守っている点も注目せねばならぬ。

蛇性の姪

美しくも幻妖の氣に満ちたこの一篇は、これも中国白話小説集警世通言の「白娘子永鎮雷峰塔」により、同題材で文章も殆ど等しい、西湖にまつわる短篇集西湖佳話の雷峰怪蹟をも参考したという。がこれにも、彼自身が、当時悩んでいた問題とその解決を、ひそかに秋成は加えている。浪漫的で典雅をあこがれる一人の文学青年、「あだ